取調べ迎合性および自己制御が虚偽自白に及ぼす影響

○丹藤克也¹

(1 愛知淑徳大学)

キーワード: 虚偽自白, 迎合性, 自己制御

The roles of compliance and self-regulation in false confession

Katsuya TANDOH¹

(1 Department of Psychology, Aichi Shukutoku University)

Key Words: false confession, compliance, self-regulation

目 的

刑事事件における被疑者取調べにおいては、虚偽自白の発生をいかに防ぐかが、冤罪防止策を講じるうえで重要な課題の1つとなっている。これまでの研究から、虚偽自白を促す社会的・状況的要因やパーソナリティ要因などが明らかにされている(Kassin, 2005)。その中でも、虚偽自白に関わる重要なパーソナリティ要因として迎合性(compliance)が挙げられる。迎合性とは、すぐに得られる何らかの利益のために、相手の主張、要求、指示に従う傾向をいう(Gudjonsson, 2003)。迎合性は虚偽自白だけでなく、望まない犯罪活動へと勧誘された際の抵抗力とも関連する(Gudjonsson & Sigurdsson, 2004)。権威ある人物を喜ばせたい、権威者との葛藤を回避したいという欲求が迎合行動の基盤とされ、自尊感情の低さや不安傾向の高さとの関連が検討されてきた

(Gudjonsson, 2003)。こうした対人的相互作用の背後には自己主張の始発や抑止、感情や衝動の制御といった内的・対人的な自己制御の影響があると考えられるが、これまでに迎合性と自己制御の関係を検討した研究はない。

そこで、本研究では気質レベルの自己制御であり実行注意の制御能力を表すエフォートフル・コントロール(Effortful Control; EC)と、他者との相互作用が必要とされる社会的場面における自己制御を表す社会的自己制御(Social Self-Regulation; SSR)を用いて、取調べ迎合性や虚偽自白傾向との関係を検討する。

方 法

調査対象: リサーチ会社の登録モニタ 618 名がオンラインで調査に参加した(男性 203 名, 女性 415 名, 平均年齢 35.1, $SD=8.1$)。

調査内容: (1) 迎合性尺度: Gudjonsson Compliance Scale (GCS; Gudjonsson, 1989, 1997) の日本語版(渡邊他, 2013) 20 項目 ($\alpha=.84$) に“あてはまる”から“あてはまらない”までの 4 件法で回答を求めた。(2) EC 尺度: 気質レベルの自己制御の指標として EC 尺度改訂版(原田他, 2009)を用いた。行動抑制の制御 11 項目 ($\alpha=.71$)、行動始発の制御 12 項目 ($\alpha=.77$)、注意の制御 12 項目 ($\alpha=.84$) の計 35 項目について 4 件法で回答を求めた。(3) SSR 尺度: 他者との相互作用が必要とされる社会的場面における自己制御を測定する社会的自己制御尺度(SSR; 原田他, 2008)を用いた。自己主張 13 項目 ($\alpha=.85$)、持続的対処・根気 7 項目 ($\alpha=.81$)、感情・欲求抑制 9 項目 ($\alpha=.76$) の計 29 項目について 5 件法で回答を求めた。(4) 虚偽自白傾向の測定: 藤・永井(2014)の場面想定法を用いた。「自分には一切過失がないにも関わらず、使用していた機器が故障した原因はあなたにあると責められ、自身の過失だと認めるよう要求された」という状況を提示した。この状況に対して“何があっても自分の非を認めてはいけない”と抵抗できる程度について 6 件法で回答を求めた。

結 果

GCS は 20 項目の合計点を尺度得点とした。EC 尺度は 3 つの下位尺度の合計得点を EC 合計得点とした。SSR 尺度については、原田他(2009)を参考に、持続的対処・根気および感情・欲求抑制の 2 因子を総合的に自己抑制的側面の能力を反映するものと考え、両因子の下位尺度得点の合計を自己抑制得点とした。

気質レベルの自己制御である EC が、能力レベルの自己制御(自己主張、自己抑制)と GCS に影響を与え、さらに 3 つの自己制御と GCS が虚偽自白傾向に影響するというモデルを仮定し構造方程式モデリングを用いた分析を行った。その結果、GCS と自己抑制から虚偽自白へのパスは有意でなかった。これらのパスを削除し、修正指標を参考に自己主張と自己抑制の誤差に共分散を設定したモデル(Fig. 1)を検討したところ、モデルの適合度は許容可能な範囲の値を示した。このため、これを最終モデルとした。単相関では GCS と虚偽自白傾向の間に有意な正の相関($r=.23$)がみられたが、因果モデルにおいては GCS から虚偽自白への有意な影響は示されなかった。

考 察

本研究では内的・対人的な自己制御が迎合性の背景にあり、これらの自己制御が迎合性を通して虚偽自白傾向に影響するというモデルを検討した。分析の結果、いずれの自己制御も迎合性に有意な影響を与えていた。特に、自己主張の高さは迎合性を低めるのに対し、自己抑制が強いほど迎合性は高くなり、社会的自己制御の側面によって影響が異なることが示された。単相関で有意であった迎合性と虚偽自白の関係は、因果モデルでは有意とはならなかった。このことから、迎合性と虚偽自白の関係は、自己制御の成分によって説明できる可能性が示唆された。今後は、虚偽自白傾向を場面想定法で測定する手法の妥当性も含め、迎合性、自己制御、虚偽自白の関係をより精緻に検討していくことが必要であろう。

 $\chi^2(2) = 1.23$ ($p=.54$), GFI=.999, AGFI=.994, RMSEA=.000

Fig. 1 虚偽自白の因果モデル。